



7月の台湾を旅する

～ 八田與一を訪ねて ～

(株) エフ設計コンサルタント

天野 大 (AMANO HIROSHI)

建設部門, 上下水道部門, 環境部門, 総合技術監理部門

(建設環境/河川, 砂防及び海岸・海洋) (下水道) (自然環境保全) (建設-建設環境)

1. 出会い

①八田與一 ②パッテンライ ③古川勝三

八田與一(写真-1)を知らない方もいると思う。2014年夏, 高松市で開かれたプラスワン*1・セミナーで, 彼を紹介した映画を観た。虫プロ製作「パッテンライ!!*2 ～南の島の水ものがたり～」だ。日本統治時代に台湾に渡った日本人の子どもと現地の子どもの交流を通して, 彼の偉業が紹介される。それまでは, 私も「八田與一・・・ Who?」のひとであった。

縁があるのだろう。古野会長の提案で八田與一に詳しい方の講演を, 徳島県技術士会が開催することとなった。2014年11月8日, 熱気溢れる講演を古川勝三さんふるかわかつみにさせていただく。宇和島市生まれ, 台湾で日本人学校の教師を勤めた方だ。そのあとの交流会で, 同じテーブルとなる。早速, 講演での気になったことを訊く。

「八田の死後, なぜ, 妻外代樹とよきは何人もの子どもを残して自殺したのか?」

「鬱になっていたかも・・・」との意味深な答えであった。

わたしが母なら, それはしないだろう・・・との疑問が残った。

古川さんが台湾で教師をしていた頃, 過去の日本領時代1895年～1945年(50年間)に日本国が, 日本人が, かの島で大変なことをしたことを知る。彼自身も, 台湾に行くまでは, そのことを知らなかった。そんなことを日本の教育界では教えられもしなかった。八田をはじめ, 多くの日本人が, その仕事が, 母国日本では忘れられた存在であった。

ところが, 台湾では, 特に嘉南の人々は八田のことを「嘉南大圳かなんたいしゅう*3の父」と慕っている。



写真-1 烏山頭うざんとうダム湖畔の座像

*1 プラスワン: 香川県技術士会をはじめとする技術士など有志の集まり

*2 パッテンライ: 八田が来た

*3 大圳: 大水路

毎年5月8日、八田の命日には国を挙げての慰霊祭が行われる。その昔、香川県の面積に匹敵する嘉南平原は、洪水と干ばつと塩害が支配する土地であった。その不毛の地を大胆なダム計画と灌漑水路網で緑あふれる沃野に変えたのが八田である。

1930年、嘉南大圳の完成により嘉南平原は台湾最大の穀倉地帯となり、人々の暮らしは豊かになる。(図-1)

1931年、工事の記念として彼の銅像をつくり、烏山頭ダム畔の丘の上に建てる。しかし、1942年5月8日、彼の乗る船は九州沖で米国潜水艦により撃沈され、不帰の客となる。彼の命日を嘉南の人々は、決して忘れない。嘉南の恩人だ。

1946年に嘉南の人々は、八田夫妻のお墓をつくる。なんと日本が敗けた翌年、中華民國の時代だ。それも材質は台湾では一般には使用しない花崗岩だ。

現在の日本人がどこかに置き忘れてきた精神が、台湾では「日本精神^{リッペンチェンシン}*4」という名称で今も息づいている。

ぜひ、八田の偉業を観たい、そして、彼の墓参りがしたい。それが台湾行きを決めた大きな理由であった。

これも縁なのだろう。2015年7月に、古川先生を案内役として徳島県技術士会が台湾を訪問することになった。先生から「台湾へ行くならマンゴーの美味しい季節に行きましょう！」との助言があったからだ。(図-2)

2. 台湾へ行くために

もう何年ぶりの海外旅行となる。そのためには、パスポートも作らないといけない。

* 4 日本精神：勤勉，正直，約束を守る，公を大事にするという善行



図-1 嘉南大圳通水前後水田面積の変化



図-2 台湾の地理

何よりまず一番に、相棒を連れて行く段取りが要る。技術士会の旅行日程は3泊4日。しかし、それだけでは、台湾を体験できるとは思えない。

相棒曰く「今回は、技術者の観るものでしょう？」

そのため、彼女の求める観光とグルメ旅も盛り込む。そして、本隊出発前に訪台することに。本隊には途中合流、5泊6日の旅程だ。彼女が行きたかった十分（ランタン飛ばし）と九分（「千と千尋の神隠し」に登場したといわれるレストランでの食事）を入れる。私の趣味で、丸1日の故旧博物院見学も入れる。

今回、事前に読んだ本。そして、旅に持参した本を紹介する。（写真-2, 3, 4, 5）

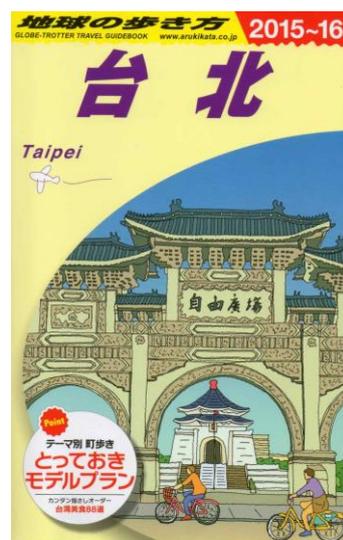


写真-2 地球の歩き方「台北」

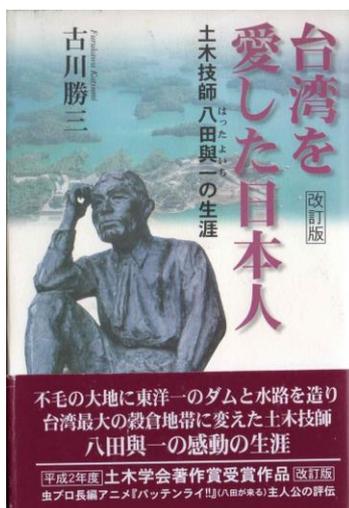


写真-3 台湾を愛した日本人～土木技師八田與一の生涯～



写真-4 日本人に知ってほしい「台湾の歴史」



写真-5 るるぶ「台湾」

①「地球の歩き方」 旅する者の定番。個人的には、どの海外旅行にも持って行く。

②「台湾を愛した日本人」 古川勝三さん渾身の著作。司馬遼太郎著「台湾紀行」でもここからの引用あり。八田與一を知る一番の本である。

③「日本人に知ってほしい『台湾の歴史』」

古川勝三著。複雑な台湾事情を手っ取り早く知ることができる。

④「るるぶ」

相棒が買ってきた本。さすがに女性目線で書かれている。



写真-6 嘉義駅前のホウオウボク (Delonix regia)

3. 7月の台湾を旅する

(1) 旅程（5泊6日）

7日(火) 自宅→高松空港→台湾桃園国際空港(桃園県)→ホテル(台北市)

8日(水) ホテル(台北市)→故旧博物院→士林夜市→ホテル(台北市)

9日(木) ホテル(台北市)→十分→九分→京鼎小館→ホテル(桃園県)：本隊と合流

10日(金) ホテル(桃園県)→桃園駅→(新幹線)→嘉義^{かぎ}駅→嘉義大学「嘉義農林高校甲子園準優勝記念碑」→烏山頭ダム「八田夫妻の墓，八田與一座像」→八田記念公園→玉井マンゴー市場→台南山上浄水場跡「浜野弥四郎銅像」→奇美博物館→度小月→ホテル(台南市)

11日(土) ホテル(台南市)→台南駅→(新幹線)→台北駅→故旧博物院→鼎泰豊^{ウーライ}→烏來「民族舞踊」→龍山寺→TAIPEI 101→夜市→ホテル(台北市)

12日(日) ホテル(台北市)→国父記念館「衛兵交代式」→加賀屋「温泉」→桃園国際空港→高松空港→自宅



写真-7 故旧博物院からの空

(2) 不思議なこと、気づいたこと

隣国であるが、知らないことが多い。

70年前(1945年)までは、日本が領有していた。しかし、その後(1972年)の国交断絶などで十分な情報が入って来っていない。

- ① 空が高い。スコールがある。(写真-7)→ 作物がよく実る。
- ② 嘉義市内を北回帰線が通っている。(図-2)→ ここより赤道側が熱帯！
- ③ 新幹線では、大きな声でしゃべっていると車掌に注意される。→ 中国人対策？
- ④ トイレでは、紙を流してはいけない。→ 下水道にやさしい！
- ⑤ 台湾では、朝食は屋台で食べる。→ 安価で美味しいらしい。(写真-8)
- ⑥ スクーターが多いが、整然と停められている。(写真-9)→ 日本精神？
- ⑦ 親日である。一方、中国人を警戒している。→ 壁に耳あり障子に目あり？
- ⑧ 石油備蓄は90日間である。
→ 臨戦状態であることを一般人が自覚している。日本は、190日。
- ⑨ マンゴーが安価で美味しい。(写真-10)
→ ただし、食べ過ぎて唇に残っている



写真-8 宿泊ホテル横の屋台



写真-9 路上駐車場

と翌朝にはかぶれる (´_`);;

ウルシ科(Anacardiaceae)であることに注意！

- ⑩ MRT が便利である。
- ⑪ 日本語でほぼ大丈夫。英語よりも書かれた漢字から推定できる。



写真-10 玉井マンゴー市場

(3) その日の出来事～スナップ写真～

各旅行日のトピックスを写真とともに紹介する。



写真-11 高松空港

第1日目(出発日)

高松空港は濃霧。(写真-11)
「最悪飛ばないかも」と言われて、ヤキモキ。内陸空港の弱点。大韓航空と全日空の便は高松に来たものの着陸できず、引き返す。後便の日本航空と中華航空は上空旋回1時間30分の後、着陸。出国できることに。



写真-12 故旧博物院

第2日目(故旧博物院) (写真-12)

台湾へ行けば、観光必行の館。
「地球の歩き方」では、1000 元のデポジットでオーディオガイドが借りられると書いてあったが、旅券預けを要求される。デイバッグの持ち込み不可。そして、AG(○印)は必携。

(館内カフェ 三希堂) (写真-13)

館内のレストラン。お腹が空けば、また休憩したければ、ここに行くといい。1日ゆっくり館内を見学し、滞在できる。

ただし、たった1日ですべての展示物を観ることはできない。有名な展示品には長蛇の列が・・・夏休みも始まっていたし。



写真-13 昼食はこれに



写真-14 堂々と夜警中



写真-15 台湾ビール

(士林夜市)

ネコのパトロール。どうも、このあたりの顔役らしい。何度か出会う。

(写真-14)

台湾料理に欠かせない台湾ビール！（写真-15）

台湾料理は、淡泊な部類の私の胃腸にもピッタリくる。それにまたこのビールはピッタリと合う。必飲。



写真-16 平溪線：線路沿いのランタン屋

第3日目（十分）

日本で事前にオプション・ツアーを申し込む。台風接近中で、台北は雨の中。中国系日本人カップルと一緒にワゴン車で十分へ。

着くと、雨もちょうど上がり、赤色ランタンに願い事を書く。（写真-16）

「世界平和」「かぞく健康」

鉄道内に入り、ロウソクに火を灯した天燈を空へ放す。（写真-17, 18, 19）

十分で出会った蝶たち（写真-20, 21）



写真-17, 18, 19 天燈上げ 写真-20リュウキュウアサギマダラ 写真-21 ルリモンジャノメ

十分駅で、列車に飛び込んできたルリモンジャノメには、次の駅で降りていただく。

(九分)

平日なのに凄い人出。観光地なり。狭い路地をたくさんの人が歩く。立ち並ぶ食べ物屋から石鯰屋、オカリナ屋等。こんな店で生計がよくなり立つって感じ。海からの気持ちのいい風に吹かれて猫たちも爆睡中。(写真-22, 23, 24)



左(写真-22)阿妹茶酒館 右上(写真-23)展望所のお気楽ネコたち 右下(写真-24)花文字屋



写真-25 記念銅像群



写真-26, 27 八田與一座像 写真-28 お墓

第4日目(嘉義・台南)

新幹線で、一路嘉義へ。バスで、嘉義大学へ。ここが有名な旧嘉義農林高校。(写真-25)1931年、夏の甲子園に初出場準優勝までしてしまった。近藤兵太郎を監督に迎えたことが大きい。「天下のKANON」-るるぶ表紙でも紹介される。

(烏山頭ダム)

今回一番の目的。

八田與一像を拝し、八田與一・外代樹之墓で合掌する。(写真-26, 27, 28)

さんごたん
珊瑚潭を臨む、緑滴る丘の上に眠るおふたり。包む樹林では、タイワンリスが遊ぶ。(写真-29)目の前に広がる珊瑚潭。(写真-30)



左上(写真-29)丘 左下(写真-30)珊瑚潭 右(写真-31)復元された居宅横に立つ外代樹像

この旅には、謎解きもあった。なぜ外代樹は子どもを残し、投身自殺したのか？

彼女は、金沢第一高等女学校を「銀時計」(最優秀賞)で卒業した。美人である。台湾にいる31歳の與一の元に、学校を卒業した16歳の夏に嫁ぐ。それも祖母の大反対を押し切って。25年間の結婚生活。2男6女に恵まれる。45歳の生涯(與一が亡くなって、3年後)。

復元された居宅を見学し、帰りがけに、古川先生がボソリとおっしゃる。本を書くための聴き取りでは、当時の方が健在で、そのお母さん方にも聴いたんだが、やはり死ぬことは考えられない、おかしいと周りの方も言っていたとか。

ここで、私の探求は留保となる。それぞれの事情は、そのままに。それ以上に推し量ることは許さない。それが私の信条であり、人がひととして自然体で生きることの自由度(権利)だと思うから。



写真-32 エントランス



写真-33 ファサード

(奇美博物館)

台湾の雄：許文龍氏作。広大な土地に、ギリシャ風の建物(博物館・美術館)、彫像を配した公園施設。(写真-32, 33)

台南市に寄付された。拝観は要予約。



第5日目（台北）

再び、故旧博物院へ。観光客が多く、有名展示品には長蛇の列。（写真-34）

台湾宗教文化の面白さは、具体的な信仰対象があること。道教では媽祖^{まそ}さま(女性)、仏教は観音さま、キリスト教はマリアさま。

龍山寺には、観音菩薩と媽祖が合祀されている。（写真-35）



夜市で食べた臭い豆腐（写真-36）味は、OK！

上(写真-34)故旧博物院 左下(写真-35)龍山寺 右(写真-36) 臭い豆腐

第6日目（帰国の日）

クマゼミの鳴く暑い朝、国父紀念館へ。孫文像の前で行われる衛兵交替を観る。徴兵制が生きている。そのなかでも、知的身体的に優れたものが選ばれ、このパフォーマンスを行う。観光客多数！（写真-37）

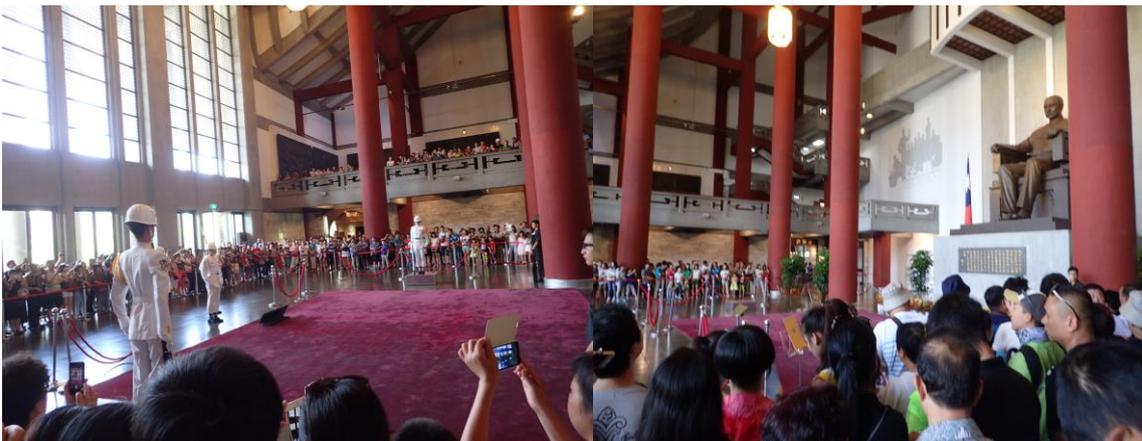


写真-37 衛兵交替

このあと、新北投温泉に足を伸ばし、6日間の汗を流し、帰途につく。
美味しい食と親日の国に別れを告げる。すぐそばにある「危機」管理を考えながら。

4. 台湾から帰って

7月12日（日）夜、帰郷。日本では、長く暑い夏が始まったばかり。

一方、台湾の印象は深く、新鮮だ。これを機に、夏の夜長、台湾関係の本を読む。

読むべきは司馬遼太郎の「台湾紀行」。図書館司書から2冊提示される。出版社が異なる。面白い！ こういう趣向には乗る。文藝春秋と朝日新聞社刊行とを読み比べながら。挿し絵のわかりやすさ、字の配置等から文藝春秋がお薦め。（写真-38, 39）

また、「聊齋志異」は、台湾の書人の家には必ずあるという。わが書棚の積読に手をつける。清代はじめの官僚志望者が書いたものだが、当時の習俗がよくわかる。花妖や妖狐は民衆の心の叫びかと思う。今も、その思いがあるのだろう。（写真-40）



写真-38街道をゆく 13（文藝春秋）

写真-39 台湾紀行（朝日新聞社）

写真-40 聊齋志異

終わってみれば、密度の濃い時間を過ごすことができた。これもご縁をいただいたみなさまのご支援の賜かと思う。改めて、素晴らしい旅をどうもありがとうございました。

また、公務員技術者には、ぜひ彼の地を訪れ、八田與一さんの偉業に触れてほしい。植民地経営は収奪だと言われながら、実は当時の日本国、日本人がやったのは、とてつもないインフラ整備・文化整備だった。それが今の台湾の礎になっている。それを知っているからこそ、台湾の人々は、3・11にも多額の援助をしてくれた。「恩」を大切にする国民性だ。日本人として、感謝してもしきれぬものではない。一方、隣国からの脅威にさらされながら、試行錯誤しながらも、凜として生きている。

全ての国が理想の国家像を求め「社会実験」をしているとするなら、台湾はその理想形だろう。応援したい。司馬遼太郎の言葉「数奇なひと」に触発されて、次を歌う。

数奇なる 運命背負い 舵取りす

美麗（うるわし）国に 生まれし君は

（大）

以上

- ※参考資料 ・ 図-1「臺灣農業發展與轉型」より ・ 図-2「台湾 ing」をベースに改変
- ・ 図-3 台湾観光協会「台湾全図」 ・ その他写真 天野撮影
- ・ 古川勝三著「台湾を愛した日本人」(創風社出版)ほか



©台湾観光協会 地図協力交通部觀光局國民旅遊組、國民旅遊出版社

図-3 台湾全図